信州アカシア林住期　その二

夏の変転

夫馬　基彦

この夏はすっかり天候不順に翻弄されてしまった。

まず五月の連休明け、ちょうど立夏の頃から我が家の界隈は夏日に近いほどの気温となったのを手始めに、五月下旬になると今度は妙に寒くなり、六月は半ばを過ぎると逆に真夏日になったりした。梅雨が上ったとも思えぬうちに、日がかっと照り気温が三十度を超したのである。暑さに弱い私はおかげで以降、頭がいささか朦朧模糊とし続けた気がする。

尤も天候というものは過去三、四年をきちんと比較すれば、いつも相当変化しているのが常らしいが、人間は浅はかで、喉もとを過ぎれば暑さも寒さも忘れるから、要するに自分が気持よくしていられないと、あれこれ天候の方をあげつらうことになるのだった。

それで私はそんな時に限って行きつけのそば屋「時そば」に行って、カウンター席からマスターの新海君に話しかけたりする。彼は小諸でわたしが気楽に話を出来る数少ない一人なのである。

「今日は暑いねえ。これで梅雨どきと言えるのかしら、全く」とか、

「今日は妙に冷えるからあったかいかけ(ゴマ点）にする」

などという具合だ。すると新海君の方もいつもきまじめに答える。

「かなり不順ですよね。雨が降らなすぎます」とか、

「今日はバイクだとここらがスースーしましたね」

などと薄いTシャツの肘上あたりをさすって見せたりするのは、彼もそういうことにかなり敏感なたちだからだ。

「小諸の天気はやっぱり山の天気なのかねえ?」

私が小首をかしげながら問いかけると、彼もちょっと小首をかしげて言う。

「うーん、ある意味そうなのかもしれないけど、ぼくから見るとここらはかなり平地の天気ですね。うちの方なんかはもっと変動激しいですよ。雨や霧も多いです。あ、八千穂の家のことですが」

八千穂というのは小諸から佐久平を突っ切って西に小一時間行った佐久穂町の旧地名で、彼の実家がある。私は一年くらい前ドライブがてらぶらりと訪ねてみたことがあるが、八ヶ岳を後背地にしただいぶ山あいの谷間の集落だった。坂道の端をきれいな水が音立てて流れている静かで清楚な村で、彼の家はその中ほどにある中規模農家のよそおいだった。山のせいで村全体の日照時間は案外少ないかもしれない。出てきた私と同年輩のお母さんの話によれば、嫁に来たころは明け方暗いうちに鶯（うそ）が「ホー、ホー」と鳴いて気味悪かったそうだ。

「そうだろうな。あの辺は気温もこっちより二度くらいは低いんじゃない？」
「かもしれません。こっちへ来るとあったかく感じますから」
「小諸は晴天率日本一だもんね」
と、これは横にいた私の連れ合いである。だが、これは少し間違いがある。晴天率は確かに日本有数だが、それは佐久地方一帯がそうだし、ほかに岡山県の一部なども同程度だ。彼女は小諸育ち小諸自慢の強い性格だから、郷土のことになると何でも少々オーバーになる。
「まあ、雨は少ない。浅間の夕立音ばかり、と言うくらいだもんな。でも曇りは結構多いんじゃないかな。小諸は街じゅう坂で出来てるけど、ゆったりしてるから山の気候とは違うんだろうね」
「ですね。佐久平だと完全に平地ですから、晴れは多いかもしれません」
新海君はこの四月に結婚し、新幹線佐久平駅近くのアパート暮しになったのである。今はそこからバイクでこの小諸の街なかの店に通っている。通勤時間はたった二十分弱だ。私は家からこの店まで歩いて一五分かかるし、我が家は坂の一番下、住宅地のはずれそのもので、その先はもう森と崖だし家の三方は樹木に囲まれているから、今や生活環境としては彼の方がよほど街暮しだ。
「じゃ、傘なぞ要らないんじゃない」
これは私が少しからかった。実際、新海君は合羽姿は見た記憶があるものの、傘を持った姿は見たことがない。衣類も持ち物もいつも質素で少ない。
「いや、そうもいきませんが、峰子はほとんど使わないですね。駅まで三分だし、向うは地下街通って行けますから」
峰子さんは新婦で二人とも三十代半ば過ぎだ。いや、はっきり聞いたことはないが新海君はもう四十かもしれない。「向う」というのは峰子さんが新幹線通勤している東京渋谷のことだ。彼女はそこの出版社勤めである。佐久平駅に入ってしまえばあとは屋根のあるところばかりだ。
「便利なもんだ」
私が言うと、連れ合いが「フーム」と息を吐いてから呟いた。
「でも、やっぱり通うのは大変でしょうね」
すると新海君も言う。
「そうですね、往きはまあいいんですが、還りなんかタッチの差で乗り遅れると、大宮で五〇分待ちになったりするみたいですね。帰りはほとんど九時過ぎですよ」
最後の言い方には少し恨みがこもった感があったので、私も連れ合いも頷いてしばし黙った。遅咲きの変り種カップルとはいえ、新婚でそれでは確かに気の毒だ。
このカップルがどんな経緯でこうなったかは、まだはっきり知らない。私も連れ合いもあれこれ憶測はしているが、ストレートに聞く気にならない。全部は知らない方がなんとなく奥行きが残っていい気がしている。二年以上ほぼ毎週来ているうちにぽつぽつ分って

いったところでは、新海君は初め小諸の隣町の割合大きな電機会社の工場に勤めていたけれど、何年か後に退職、高原スキー場のレストランに勤めてからそば屋を発願し、近県などの有名そば屋何カ所かで修業ののちこの店を初開業した。店はテーブル三卓にカウンター席四人で、そば打ちから給仕まですべて一人である。峰子さんとはどうやらスキー場レストランで知り合ったらしい。彼女もそこでアルバイト中だったか。話の具合ではそれはもう十年以上も前のことのようだ。

「峰子さんは一体いくつの時だったのかしらねえ?」

連れ合いは何度かそう言ったが、未だによく分らない。出版社員とスキー場のレストラン、脱サラそば屋の貧乏マスター、というつながりがすぐは繋がらない。峰子さんは出版社の仕事で台湾や韓国などへもちょくちょく行く、割合仕事の出来そうな人なのである。

ヒントは新海君の作るそばが極めてうまいことではと思える。彼は随分凝り性である。季節によって北海道摩周産のそばにしたり、茨城産にしたり、むろん信州産にしたりし、そのつど必要量しか粉にせず、丁寧に手打ちする。一人分の量をいちいち秤で計り、ゆで時間もいちいち計測する。つゆは上等の鰹節をたっぷり削り塩辛くない醤油で仕上げる。わさびはむろん手おろし、ねぎは白いところしか使わない。そば湯にはそのつど新しい粉を少し入れる。

ゆえに彼の作るそばは抜群にうまい。そば好きの私は小諸へ引っ越し後、市内のそば屋をほぼ食べ歩いたが、文句なくここが一番だった。以来、私は事情がない限りほかの店には行かない。

峰子さんがそばの味のため彼と結婚したのかは分らない。いくらかはあるかも知れぬが、どうも違う気がする。そばの味ゆえだけなら、店の常連になるなり、そば打ちの弟子になればいい気がする。どうも彼女は彼のこの凝り性、頑固さ、美意識に惚れたのではという気がする。

だが、彼は店の宣伝・営業は苦手というかろくに意を用いず、何度言っても表にここらではどの店も出している幟一つ立てない。おかげで客は午で一日三、四組、夜はほとんどない。つまり食えているのかどうかすら怪しい。そんな男と東京の出版社員がなぜ結婚するのか。

私と連れ合いはそのことにずっと首をひねりながらここへ通い、土日のどちらかは店の手伝いに来る峰子さんとも親しくなり、結婚の際はささやかながら祝いの品まで贈ったが、まだ分らない。そしてこの日もまた、謎は解けぬまま店を出た。

私は帰宅すると、また庭へ出て畑を見てまわった。

今年は全体にどうも不調だった。寒いうちに種付けしたジャガイモだけは好調で、先だっての第一次収穫は頬が緩むほどだったが、その後はトマトといい、茄子、きうりといい、なにやらよくない。茄子は一株しかうまくいかず、トマトも半分は茎の根元を虫にやられ、きうりはまあまあだが下半分が枯れぎみで生りが去年の半分程度だ。今年はほかにねぎや

オクラ、モロヘイヤ、小かぶも作りたくて、順次それらのための畝作りをし、苗を植えたり、種を蒔いたりしたのに、オクラやモロヘイヤはろくに伸びもしていないのだった。

天候不順のせいもあるが、他にも何か理由があるのだろうか。素人百姓の腕のせいはむろんあろうが、去年は結構とれたのだから、それがメインではない。まさか放射能のせいではあるまいがと思うが、いっとき栃木や近県あたりでは何種かの植物が異常成長したなどという話もあったし、我が家の界隈でも蝉の鳴き方がおかしい感がある。例年は八月になってから鳴く蜩（ひぐらし）が今年はもう鳴き、そのあとにミンミン蝉や油蝉が鳴く。明らかに順序が逆転している。

農産物は福島県周辺の三、四月のほうれん草や葉ものからかなりのセシウムが出た騒ぎから始まって、だんだん神奈川や静岡県のお茶っ葉、宮城や山形の牛乳から牛肉までと、セシウムの検出が相次いだ。神経質な連れ合いは何を買うにも北海道や九州産にし、牛乳は一時豆乳に替った。

豆乳は旨くない。なんともまずい。牛肉もかつては敬遠していたオーストラリア産になった。

「ぼくらはもう六七歳なんだから、あんまり気にせず従来通りに食べないか」

私は言うのだが、連れ合いは言下に答える。

「ダメ。食べ物は気になる！」

私もそれ以上言わないのは、ほうれん草やお茶っ葉、牛の飼料の藁が放射能汚染しているのなら、自分で作っているトマトやきうりや野菜なども少しは汚染していないはずがないと思うからだ。現に長野県の放射線量も所によっては群馬と同じくらいあるし、福島からの距離も神奈川や静岡よりはるかに近い。検出報告がないのは検出されないからではなく、測定自体をしていないからだ。いちいち測定したら日本中がパニックになるだろう。だからスーパーで買うものだけ気にするのもどこか矛盾があるのだが、人間はそういう矛盾を実行しないと心のバランスがとれない。

実際、毎日野菜や樹木に接していると、植物とは不思議なものだとつくづく思う。実際私は畑の作物を見るたび収穫するたび、不思議な気分がすることがある。なぜかくも真っ赤な熟したトマトが生るのか、なぜ毎日次々と緑のきうりが生じるのか、なぜ土の中でじゃがいもはこんなにゴロゴロと多数出来るのか。ここらの土地はもともと浅間の火山弾火山灰地で、土は赤くスカスカしており、どう考えても大した養分なぞなさそうに思えるのだが、じゃがいもは時にこぶしほどの大きさになり、茄でればはちきれんばかりにホカホカだ。おまけにどの植物も一つ一つ皆違って、あるものはねばねばと粘液質をはらみ、あるものはとびあがるほどの辛さを凝縮させ、あるものは色も味も絶妙としか言いようのない仕立てに出来上がる。

全く不思議そのものである。それを毎日食べて生きている人間も不思議で、不可解で、身勝手そのものの存在だが、ともあれ畑作り・庭仕事の意識の深層には、放射能と原子力への何かどよりとした濃い思いが淀み続けている。

新海君が大学の数学科出身であることが分ったのは八月の初めだった。
「えっ、ほんと？」
私は時そばのいつものカウンターで隣の山関（やまかん）さんに声を上げた。山関さんは時そば最大の常連で七五歳、無類のそば好きで週に三回は昼食に来る。席もカウンターの右端と決まっている。古い北国街道沿いのブティック「山関」の主人で、私とはいわばそば友達だ。
「ほんとなのよ。ホラ、これ」
山関さんが見せてくれたのは小諸市発行の広報だった。その三ページめに「この人」という欄があって、そこに新海君の写真が出ているのだった。ほっそり色白やや長めの顔が、店の客席を背にちょっと照れたように笑っている。カウンターの向うで当人も「エヘヘ」とまるで同じ表情で笑っている。
記事は時そばの評判、特徴、メニューとまあ型どおりの内容だが、「マスターの新海さんは大学の数学科出身、脱サラの変り種」と書いてある。
「へーえ、数学科とは意外だなあ。なんか理科系的だなとは思ってたけど」
私は実は大学出ということ自体も意外だったのだが、しかしそれは聞いた途端いかにもありうる気がした。数学科というのも一分後くらいにはなるほどありうると思えてきた。あの計測好き、なんでも精緻なやり口、潔癖症、商売下手、頑固さ、すべてさもありなんだろう。
「ふうーん！」
私はもう一度声を上げた。今日は一人で来ていたが、連れ合いがいたらもっと大きな声を出したろう。
「いや、おれも驚いただ。うちの息子も数学科なのよ」
「えっ、おたくも！」
私はこれにも驚いた。見ると新海君も目を丸くしている。山関さんの息子は確かふだんは漬物屋勤めで、週末だけは山関さんと一緒に東京浅草へブティック用仕入れに行く日常のはずだ。歳は四十ちょっとだったか。
「そうなの。信大の数学科」
「へーえ、ああいうとこは普通はがっこの先生なんかになるんじゃないの」
信州大学はもともと師範学校が前身の一つだったはずである。
「そうなんだけど、それがそうならなかっただ。卒業するとスーパーに勤めただ。それで漬物屋に移って、今の通り……」
何か言いかけたが途中で消えた。「まだ独り…」と言いかけたんじゃないかと私は思った。

「ふうーん」と向うで新海君もじっと山関さんを見つめている。何か言うかと思ったが言わない。私は思わず聞いた。
「ひょっとしたら新海君も信大？」
新海君はあわてて首を振り、笑いながら言った。
「いえ、違います。ぼくはもうちょっとそこらの学校です」
「ちょっと」も「そこら」も日本人がよく使うぼかしの手法である。信大は地元では有名校だ。
私はその先は打ち止めて、峰子さんとの縁はその辺も関係していそうだと考えていた。山関さんも黙々とそばの大盛りを食べていたが、しばらくしてポソリと言った。
「人生は分らんもんだに」
私も「まったく」と答えた。私は愛知県生まれの愛知育ちで、十八歳以降は大部分が東京、それが今はどういうわけか信州で畑や庭を相手に暮している。十年前には思いもしなかったことだ。
何を思っているのか向うで新海君も微妙な笑い方をしている。思わぬ同類の出現に感じているのか、それともひょっとしたら己れを嗤っているのかもしれない。
山関さんとはこのあとお盆にもまたここで会った。いつもとは反対側のカウンターの左端に隠れるように座り、右隣に背だけヌクヌクッと伸びた中学生ふうを座らせ、卵焼きを食べさせていた。卵焼きはこの店ではそば以外焼き味噌とこれしかないメニューの一つで、出汁（だし）が利いていて酒の肴にうまいしろものだ。中学生がそれを黙々と食べている。むろん卵焼きは子供にも好かれる。山関さんは多分それでわざわざ食べさせているに違いない。
「お孫さん？」
問うと、「そう」と中学生ごしにだいぶはにかんだ表情で答えが返る。こういうときうれしそうに元気に答える人もいるが、山関さんはなんだか恥ずかしそうである。左端の席に隠れた様子なのといい、こんな大きな孫がいるのが照れくさいのだろうか。私はまだ孫を持ったことがないので、そこらの気持は分らない。
「お盆だから。新潟から来たの。娘が嫁いでるだ」
「ああ、いいですね。お盆におじいちゃんとそばを食べる」
「そう、ハハハ」
小柄な山関さんよりだいぶ大きな少年は卵焼きを食べ終ると、そばの大盛を食べ出した。その間一言も言わない。おじいちゃんが一言二言「うまいか」などと言うと、その時だけ「うん」と低ごえに答え、また黙々と食べる。食べる以外ほかに用はないといった風情だ。あるいは少年流の照れ隠しか。
そうして食べ終ると、
「もういいか」
「うん」

と短い会話を最後に、山関さんと孫は「じゃ」と一緒に立ちあがった。山関さんは私にも「じゃ」とまた照れ笑い半分言って、仲良く出ていった。

3

八月は三〇度を超える日がずっと続き、ふと気付くと東の畑のオクラとモロヘイヤが異常に伸びていた。二ヶ月ほどろくに伸びなかったのに、二、三度、夕立が続いたのをきっかけにあっという間に伸びたのだ。オクラは実もちゃんと生り、モロヘイヤともども粘りけも十分で結構うまい。なんだかちょっと狐に鼻をつままれたみたいだった。

ところが、下旬になると今度は急に摂氏二〇度から二四度の涼しさというか夏としてはいささか寒いくらいの気温が襲来し、トマトやきうりなど他の野菜は枯れ葉が目立って、もはや生りも終りの気配となった。繁っていたアカシアや桑の葉にもほんの少し黄色が見え出し、時おり風にひとひらくらいが舞ったりする。西隣の森の入口の桂は全体がうっすら黄色を感じさせ始めた。黄色になったのではない、緑のうちに黄をはらみ始めたのである。

連れ合いは仕事を兼ねしばらく台湾へ出張していた。台湾人を主人公にしたノンフィクションを執筆中だったのである。私はひとりで毎日庭を睨み、気になった枝を見つけては伐った。アカシアの枝もあるが、主たる敵は夏の間に猛烈に繁茂した桑で、顔ぐらいもある大きな葉を鈴なりにさせた枝がリビングからの視野を大きく占めていたのである。私はその枝をリビングの私の好きないつもの椅子から一本づつ見極めては、そのつど庭に出て伐った。伸縮式の長さ六メートルほどになる長柄に鋸をとりつけ、両腕を伸ばして挽く。長柄が不安定だし、何しろ慣れぬ仕事だから相当疲れるが、桑自体は伐りやすい木で、暫らく格闘すればばさりと音たてて太枝が落ちる。

落ちるとそこに空間が急にポッと空き、向う側が見える。七、八メートル先の柵際の唐かえでの樹間から、道路やその先の火山庭園の白樺の木々までがよく見える。リビング前の木が済むと今度は西側下の茂みの桑の枝をまた伐る。伐る目安は、唐かえでや山桜など黄葉が楽しみな木をよく見えるようにすることだ。

私は木を伐る爽快さは何だろうと考えたりする。汗ぐっしょりになって眺め直してみると、つい伐りすぎているのに気付いたりするが、そういう際に考えるのだ。伐ったあとの空間の変化、視野の広がり、黄葉や紅葉を見る楽しみ等もあるが、伐ること自体の快楽、植物の生命力への対決感、おのれが管理制御できる心地良さ、などもある気がする。ひょっとしたら植物への恐怖感さえ多少あるかもしれない。植物はほっておいたら人間などの意思は無視して伸び続けたり、勝手に枯れたりするのである。繁茂も猛々しいくらい活発だったりするが、枯れるのも、え、これがどうして、というくらい突然そうなったりする。どちらもどこか怖い。それに比し人間は勝手に繁茂しすぎたりすることはない気がする。

いや、あるか。他の種からすればそう見えることはありそうだ。繁茂しすぎないと感じるのは私がもはや繁茂する能力がないだけなのかもしれない。それに原子力は、あれは一体何だ。人間の欲望の繁茂の結果ではないのか。

友人の作家経堂聡から久しぶりにメールが届くようになったのはこのころだった。

初め私が近況報告をしたらすぐ彼から長い重い返事が来て、私は心がシンとした。彼とは同い年なのだが、彼のすぐ上の兄さんが父親の命日のちょうど一週間前に脳出血で突然倒れ、何とか手術は成功したものの、以降ほぼ寝たきりだというのである。メールの書き言葉でだが、彼は言う。

「そういう事態になったら延命は図らないでくれと彼は以前からしばしば言っていたが、いざとなるとそれは難しいものだ。彼の奥さんはそのことを考えるたび猛烈に落ち込み、結局何も出来ない。おまけに彼は生きてはいるものの知力は二、三歳児並で、それでもリハビリはしようとする。耳も相当遠くなり、彼と話すには耳元で怒鳴るようにせねばならない。

長兄もそこへ時々見舞いに来るが、彼は癌でこれまで四回手術した上、やはり耳が遠い。それでも何回かやって来て次兄を励ます。おかげで三人の兄弟はまるで顔をくっつけ合うようにして怒鳴り合うわけだ」

私はその兄さん二人を知っているばかりか、下の兄さんとは学生時代以来何度か会っている。私が木造アパートの一室に住んでいた時の冷蔵庫はその兄さんに貰ったものだし、それは結婚して引っ越してからもずっと使っていた。通算一〇年は使ったろう。

「歳をとるというのはこういうことかな。やがて我々も似た状態になるのかもしれないね」

私は今や初老ないし老人になった、かつては若かった三兄弟が、顔をくっつけ合うように大声で話を交わしている様を想像しながら、そう返事をしたが、パソコンの前でしばらく本当に黙り込んだ。歳をとるのは怖いような、いや、ただ哀しいような、複雑微妙でいて、ごく単純当り前なような、曰く言い難い想念が蠢く。実際、自分はこのごろえらく物忘れが激しいし、疲れやすい。老化の実感は明らかに迫っている。

私はそれを振り払うようにキーボードを打った。

「ぼくは来月、ウズベキスタンへ行こうと思っている。海から世界で一番遠く離れた中央アジアの国だ。今年の春から娘が夫の勤務の関係でそこに住んでいるので、一度行くことになったのだが、行くと決めてから気づいた。思えばぼくは丸四十年前にそこへ行ったのだ。タシケントにサマルカンド。ぼくは玄奘三蔵法師が通ったと同じ道を通りたかったのだが、当時の中国領新疆ウイグルは個人旅行を認めていなかったので、やむなくシベリア経由で飛行機から憧れの天山山脈を上から眺めてタシケントへ行き、サマルカンドを経てそのあとは、君も知っての通りアフガン、インドへといよいよ陸路をリュック担いでの長旅に入っていった。二十七歳だった。奇しくも同じ九月の同じ頃で丁度四十年経つ。実に、フシギな気さえする」

そのインドへの長旅はその後の私の人生に大きな影響を与えた。私はそこで流行性肝炎で死にかけたし、ヒンドゥーの思想や習慣に接して〈人生の四住期〉の考え方も学んだ。それは人生を、

一、学生期（学びの時期）
二、家住期（家庭を営み、社会生活をする時期）
三、林住期（森やアシュラム(道場)に入って静かに瞑想して過ごす　　時期）
四、遊行期(人生の最後に聖地を巡礼遊行し、死を待つ時期)

の四つの段階に分けるものだ。これは私には理想の生き方のように思え、帰国後、その影響もあって近代的な東京に住むのが嫌で、伊豆の山村で独り住まいを試みたりもした。学生時代以来志し続けた小説に関しても、完成品として初めてだった作はインドの旅を背景にしたもので、私はそれで新人賞を受賞し、作家の端緒を得たのだった。いわばウズベキスタンはそれら諸々の出発点だったと言えなくもない。

すると彼はこう言ってきた。

「偶然というよりそのこと自体がそのままで物語になっているね。君は〈旅人〉なんだ。いい旅になりそうな気がする。

ぼくはと言えば、毎日、赤児の世話だ。風呂へ入れたり、食事をさせたり。かなり疲れるので、夜は寝かせつけるために添い寝をしていてそのまま自分まで九時前に眠っちゃたりしている。三月一一日以来は、子供のため放射能関係にずいぶん気を使いもする」

彼は通算四回目の結婚をして、今は六歳と三歳の子育て中なのだった。「よくやる」というのが感嘆をまじえた率直な感想だが、ともかく彼は挫けずやり続ける。その彼から〈旅人〉と言われ、私は戸惑った。かつては彼こそがよほど旅人だったからだ。初めて日本を出てヨーロッパへ行ったのは私と一緒だったが、彼はそのあと一〇年にわたって放浪をつづけた。ヨーロッパや中近東・インドのあと再びヨーロッパから南米に渡り、インカの遺跡界隈で風土病にかかって臥した。息絶え絶えそうな感じの手紙からは、どうも栄養不足が原因ではないかとさえ察せられた。で、私は「もういい加減に旅を切り上げろ。早く文明国へ行って体を休め、そこから日本に帰ってきたらどうか」と手紙を出した。だが、彼はそれでも旅を止めず、中米・アメリカ各地とさまよい続けたのである。

その彼が今ではすっかり定着したばかりか、六十七歳になって子育て中とは信じられないくらいだった。今の子供たちが出来て以降、彼は国内の旅すらろくにしていないのではなかろうか。

それで私は書いた。

「一度、気晴らしに小諸へ来ないか。我が家から歩いて行ける場所に天然温泉付きのホテルもある。藤村、牧水、虚子にゆかりの場もそれぞれあるし、古い北国街道もある」

試しにぐらいのつもりだったが、彼からはすぐ返事が来た。

「行きたい。二泊三日で週末がいい。平日は調整がつかないから」
平日は若い奥さんの仕事があり、彼が子供から手を離せないのにちがいない。
私たちはそれから一案二案と日程を検討し合い、彼は九月二日から二泊三日で来ることになった。会うのも久しぶりだし、小諸はまったく初めてだ。
だが、なのにまたしても突然の天候異変が起ったのである。大型の台風十二号が直前からのろのろと南海上を蠢き始め、やがて日本に近づくにつれ各地が大雨となった。そうして当の二日には四国に上陸、三日には中国地方を縦断となって、万事休すだった。少しくらいの雨なら温泉に入って酒でも飲んでごろごろするかという案も途中浮上したが、長野県はだいぶ離れているはずなのに雨風は相当強く、それも無理そうだった。
旅のこと、書くこと、人生のこと、老い、それらあれこれを話し合ってみたかった私はがっかりしたが、しかしこれも何かの必然、天候はまさに天意、そのうちまた機会はあろう、との思いもごく自然にあった。このごろは何かにつけそうなのだ。若いころみたいに選択肢はこれしかないといったふうには思わなくなった。きっとこれが年の功なのだろう。

それから私はもっぱらウズベキスタン関連の本を読むのに集中した。外国行きは私も四年ぶりであり、いささかの張り切り感も生じていた。三蔵法師以来のシルクロードとオアシスの歴史、私が訪れたソ連時代とソ連解体後の独立、変化、現状。第二次大戦直後、旧満州などからの日本人抑留者が相当数いたことなど、日本とのかなり意外な関係。どれも面白い。
が、実際に具体的準備を始めるとなかなか大変でもあった。ウズベキスタンは短期の観光にもビザが必要で、個人でとるとなるといちいち東京の在日大使館へ行かねばならない。申請・受取りと二度行かねばならない。これは信州在住の身にはかなり骨が折れる。飛行機も直行便は週に二回しかなく、それも客が集まらぬ場合はしばしば運行自体がドタキャンになるとのことだった。ソウル乗り継ぎ便にすればほぼ毎日あるが、時間は半ば夜行便で、乗継ぎ待ち時間を入れ片道九時間かかり、着くのは現地時間夜一〇時半、日本時間だと夜中の二時半だった。ホテルへ着くのは三時半になろう。
おかげで、準備をするにつれ一方で億劫な気分もだんだん生じてきた。なにしろこのごろの私は夜九時半にはベッドへ入る習慣である。これじゃひょっとして体を壊すんじゃないか。壊さないまでも時差ボケで着いて二、三日はボーっとしているんじゃないか。おまけに向うはカラカラに乾いた気候の上、昼夜の温度差が二十度くらいあったりするらしい。などとあれこれ考え始め、もうそんな旅なぞする歳ではないのかもしれない、信州で湿潤な林に囲まれおとなしくしていた方が分にあってるのではないか。それが自分流であれ林住期というものではないか。そんな思いが去来するのだった。
けれど、それでも止める気にまで至らなかったのは、ビザが郵送で予想外に簡単に取れたのと、何と言っても四十年前にはこの世に影も形もなかった自分の娘が、今、かの地に日々を暮しているという〈不思議さ〉ゆえだろう。私は次第に四十年前の自分自身に会い

に行くような気分になっていき、経堂の言う〈旅人〉の感覚がだんだん身に生じ始めたのだった。

出発の前日、連れ合いと一緒に時そばに行くと、丁度日曜日だったせいで峰子さんもカウンターの中に手拭いかぶり姿でおり、いつもの山関さんと新海君と三人で声を合せて、

「行ってらっしゃーい」

と明るく言ってくれた。

（了）